

## DESTINATION JAPAN

### 復活した福島観光—震災を乗り越え再び訪日客を迎え入れ始めた観光地

CNN Beth Reiber 記者、2019年12月9日付け

福島発(CNN)「秋の肌寒さを感じる朝、福島県三島町の展望台では只見線の電車がアーチ型の第一只見川橋梁を渡る風景を捉えようと、大勢のカメラマンが待ち構えている。主に台湾からの観光客だ。

その人垣の中に地元の写真家、星賢孝さんの姿もあった。郷土の写真を誰よりも多く撮り続け、たった一人で地域の草の根ツーリズムを開拓してきた人物だ。

只見川を見渡せる丘の上の眺望地を発見した彼は地元自治体を説得して階段を設置させ、眺望地へのアクセスを改善した。今は高齢者向けのエレベーターの建設を働きかけている。

9時5分に電車が姿を現すと、セレブの登場を待ちわびたかのようにシャッター音が鳴り響く。

「新たな産業を誘致するのは容易ではありません。観光は地域振興をもたらす最善の方法なのです。」星さんは通訳を介してそう語った。

福島を訪れる観光客の多くが、自国では味わえない秋や冬の季節を体験しようとやってくる台湾人だ。そのことを念頭に、星さんは展望台から撮影した只見線の写真コンテストを台湾で開催して三島町を売り込んだ。

只見川を下る霧幻峡の渡しツアーも開始した。星さんの故郷は1964年の土砂崩れで廃村となった。その彼が子供の頃に乘った渡し船を彷彿させる和船で、かつて集落があった物悲しい風景の中を巡るツアーだ。

福島に並々ならぬ情熱を注ぐ星さん。この地にしばらく滞在すれば、その熱い思いこそがここで暮らす人々に共通する特徴であることに気づくだろう。

ここでは多くの商店が何代にもわたって継承されてきた。

だが、これまで誘客は容易ではなかった。福島は六つの県からなる東北地方のひとつ。本州の東北部に位置する広大で未開発な辺境地を訪れる外国人観光客の数は日本全体の2パーセント未満だ。

そのうえ、東北沿岸を襲った巨大な地震と津波による福島第一原子力発電所のメルトダウンから八年が経った今でも、福島へ行くと聞いて人々がまず懸念するのは放射能の影響だ。

放射能に汚染された避難指示区域は今や福島県全体のわずか2.8パーセントに過ぎないにもかかわらず海外からの宿泊客数が2018年時点で12万人にとどまったのもそのせいなのだろう。

だが、すでに京都など定番の観光地を訪れたことのある訪日リピーターにとって、あるいは人ごみから逃れたい旅行者にとって、福島は人里離れた格好の代替案だ。少なくとも、まだ知られていない今のうちは。

日本で三番目に大きい県でありながら人口は二百万足らず。福島県は大部分が農村地帯で、曲がりくねった山道や森林、急流、滝、湿原や高原によって構成されている。

日本人にとって福島といえば、秋の紅葉、豪雪、武士道精神を象徴する会津若松の史跡の数々、桃に柿、独特な郷土料理、130以上もある湯治場、そして60を超える酒蔵が有名だ。

「来日は五回目です。SNSやユーチューブの投稿を見て福島に決めました。」そう語るのは英国から訪れたナタリー・ミックさん。「五日間かけて見どころ満載の会津若松周辺をレンタカーで巡る予定です。」

日本は福島の復活を確信している。その証拠に、2020年に開催される東京オリンピックの聖火リレーの起点として福島県を選んだ。サッカーのナショナルトレーニングセンターがあるJビレッジがスタート地点となる。

Jビレッジは原発事故の現場から20キロの地点にありながら高台にあったおかげで津波被害を免れ、災害対応にあたった千人ほどのスタッフの臨時拠点となった、復興のシンボルともいえる場所だ。

聖火はそこから北上し、2011年以來着実に復興を遂げてきた海沿いの市町を通過する。そのひとつである相馬市は国内最新・最長のハイキングコースの南の起点となっている。四つの県にまたがる総延長900キロのみちのく潮風トレイルは心の癒しと海外からの誘客を目的に建設されたコースだ。

そこから内陸に向かい様々な町を通過する聖火リレーの通り道には、温泉で有名な県庁所在地の福島市がある。

東京から新幹線でわずか92分。九つの公衆浴場がある飯坂温泉でゆったりお湯につかれば、煩わしい日常を忘れさせてくれる。日本の伝統的な旅館に泊まることもできる。なかむら屋旅館もそのひとつだ。ロビーの囲炉裏から武士たちが使った客間にいたるまで、七代目の主人である阿部寛さんが年代物の品々や建物の意匠について誇らしげに解説してくれる。

福島ではどこへ行っても京都など有名観光地と比べて料金が最大2割ほど安く設定されている。

福島市の南に控えるかつての城下町・二本松市は、どこよりも酒造りに時間をかけることで全国に名を馳せる大七酒造の本拠地だ。

創業1752年、十代目当主の太田英晴さんが率いる大七酒造は、すべての日本酒を手間暇のかかる伝統的な生酛造りにこだわって作っている。生酛造りは1700年頃に発達した手法だが、より近代的な手法の定着によって今ではほとんど放棄されてしまった。

高品質な味わいを維持するため、大七酒造は革新的な超扁平精米技術も独自開発した。

その結果、酸化に強く経年によって熟成される、まるでワインのような日本酒が生み出されたのだ。

大七酒造ではテイastingも含めた酒蔵見学を提供している。

「一番売れているのは二本松城の門から名前をとった箕輪門。人気の理由は優れた風味と凝縮された旨味です」と、太田さんは言う。「濃厚でクリーミーな料理との相性が抜群です。」

福島県で最も有名な城下町は、県西部の会津地方にあって「サムライシティ」を自称する会津若松市だ。日本を250年以上にわたって支配した徳川幕府が倒れ天皇が再び実権を握ると、将軍に忠誠を誓う武家と皇軍の間で戊辰戦争が勃発した。

勇猛果敢な会津藩の武士たちが最期の戦いに挑んで敗北したのが、ここ鶴ヶ城だ。

何千もの戦死者の中には武家の女性や、鶴ヶ城が炎に包まれたと思い切腹した白虎隊の十代の若者も含まれていた。

今では鶴ヶ城内に歴史博物館が開設され、敷地には日本庭園や茶室のほか千本の桜の木が植えられている。

近くに残る会津武家屋敷は家老として会津藩に仕えた西郷頼母が家族や使用人、家来らと暮らした場所だ。

改装された38部屋の屋敷が想起させる豪勢な暮らしは戊辰戦争の終焉とともに悲劇的な形で幕を降ろすことになった。(敗戦を知った)西郷の妻は三人の幼子を手にかけて後、十代の娘たちや他の親族もろとも自害して果てたのだ。転戦中だった頼母自身は七十代まで生き長らえた。

会津若松は酒蔵や温泉に加えて郷土料理も有名だ。例えば、根菜、乾燥ホタテ貝、シイタケなどが入った具沢山の汁物で冠婚葬祭に欠かせない「こづゆ」。

ほかにも、ご飯とおかずを杉で作った筒状の容器に入れて蒸し上げるシンプルなわっぱめしや、ご飯と千切りキャベツの上にパン粉をまぶして揚げたトンカツをのせて濃厚なソースで食べるソースカツ丼などがある。

ラーメン人気も根強い。近隣の喜多方では市内だけで120軒ものラーメン屋がしのぎを削り、朝食にラーメンが定番となっている。

会津若松の南には福島県で最も多くの人を訪れる大内宿がある。その昔、会津と日光を結ぶ会津西街道の一大宿場町として栄えた町だ。

当時は米だけでなく大名行列もこのような街道を経由して江戸(現在の東京)を目指した。各地の大名は隔年で江戸に滞在することを義務づけられていたからだ。

驚くべきことに、江戸時代(1603年~1867年)の茅葺き民家が今でも街道沿いに残っていて、蕎麦屋、土産物屋、民宿(B&Bの日本版)として使われている。

会津若松の西に位置する柳津は人口3,400人、七軒の旅館がある只見川沿いの魅力的な湯治場だ。町を見下ろす巨岩の上に建つ福満虚空藏菩薩円蔵寺は国内有数の裸祭が行われる寺として広く知られている。

この祭では、ふんどし一丁の男衆が寺の階段を我先にと駆け上り、鐘つき堂につながる一本の綱をつかもうと本堂の中で押し合いへし合いする。鐘を鳴らすことに成功した者は一年間幸運に恵まれるといわれている。